

氏 名	あき 秋 やま 山 しん 進 ご 午
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 401 号
学位授与の日付	平 成 12 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	東北アジア民族文化研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 上 原 真 人 教 授 山 中 一 郎 教 授 杉 山 正 明

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、著者が専攻する中国考古学にかかわる研究のなかから、おもに遼寧省西部(=遼西)から内蒙古自治区東南部(=内蒙古東南)を中心とした東北アジア地域の、新石器時代・青銅器時代(初期金属器時代)から3世紀に至るまでの時代を扱った論考を編集して一書としたものである。

東北アジア地域は、黄河流域や長江流域と並んで、中国新石器時代の初めから、独自の文化を生成し発展させてきた。その文化は新石器時代・青銅器時代、そしてそれ以後においても、東の朝鮮半島や日本、あるいは北方ユーラシア草原地帯を経由した西方世界、そして南の中原地域に対しても、ある程度の影響を与えてきた。すなわち、極東地域の文化発信基地としての役割を果たしてきたのである。本論文は、東北アジア文化の独自性、および継続性を叙述することを目的に執筆・編集された。

本論文は、以下のように構成されている。

導論

- 第一部 赤峰紅山考古研究(新石器時代の東北アジア)
- 第二部 東北アジア文明の源流(東北アジア青銅器文化始源)
- 第三部 東北アジア青銅器文化の発達
- 第四部 中国北方民族文化研究

「導論」の「Ⅰ 中国新石器文化の三地域区分」においては、黄河流域、長江流域、東北地方の三地域を、単なる土器の違いによる区系類型ではなく、雑穀地域、稲作地域、狩猟・漁労を主とし雑穀栽培を従とする地域という生業形態の違いで区分し説明する。そして「導論」の「Ⅱ 玉器に見る中国新石器時代の各地域」では、中国新石器時代に祭具として発達を遂げた玉器が、その三地域において、それぞれ系統的に発展し、特有の形態を持つことを明らかにし、それが生業形態の違いを基盤とした祭祀活動の違いを示すものとして積極的に評価する。そのような手続きによって、中国内における文化的な特質を明らかにした上で、「導論」の「Ⅲ 赤峰紅山考古研究概要」では、本書の対象となる遼西から内蒙古東南部地域の新石器時代から青銅器時代の研究史を概観する。すなわち、京都大学考古学研究室による『赤峰紅山後』(1938年)で提示された赤峰第一次文化・第二次文化の時期区分が、新中国の研究者によって再検討され、紅山文化とそれに続く夏家店下層・上層文化として認識されるに至った経緯を明らかにした。

「第一部 赤峰紅山考古研究」においては、先紅山文化(興隆窪文化と趙宝溝・小山文化)、紅山文化、後紅山文化と発展した東北アジアの新石器文化を、各文化ごとに詳述し、その実体と問題点を明らかにした。すなわち、「Ⅰ 興隆窪文化遺跡の踏査」および「Ⅱ 紅山文化と先紅山文化」において、踏査した先紅山文化遺跡の具体像を提示し、『赤峰紅山後』以降に判明した紅山文化の実体を明らかにした上で、「Ⅲ 近年、赤峰紅山考古学研究的進展」において、先紅山文化の最初に位置づけられる興隆窪文化に紀元前6200—5400年の実年代が与えられ、環壕集落、住居内埋葬、石造女神像、中国最古の玉器などで文化的に特徴づけられることや、近年発見された牛河梁遺跡が、積石遺構や女神廟などの墓地・祭祀遺構によって、紅

山文化の新たな文化的側面を明らかにしたことなどを詳しく論じた。

「第二部 東北アジア文明の源流」は、東北アジアにおける青銅器時代の開始を示す夏家店下層文化に関する論考である。とくに第二部は、中国社会科学院考古研究所内蒙古考古隊や内蒙古・遼寧省文物考古研究所、赤峰市文化局・博物館との国際共同研究の成果であり、新中国における考古学の新たな研究方式を切り開いたものである。「Ⅰ 東北アジア文明の源流をもとめて」において、国際共同研究の経過を述べ、「Ⅱ 遼寧凌源城子山城塞遺跡調査と研究」において、その成果の一つである城子山遺跡の調査結果を提示・検討して、「Ⅲ 夏家店下層文化の新認識」において、夏家店下層文化の特徴と問題点を提示し、それをこの地域における「文明の誕生」と位置づける。

すなわち、夏家店下層文化期の集落は、石築・土築の城壁がめぐる城塞遺跡であり、その内部の住居址には、塊石造りの壁をもつもの、土煉瓦の壁をもつもの、壁面構造のないものがあり、その差は時期差の可能性がある。また、夏家店下層文化期の墓葬の主体は、竪穴土坑内に組み上げた木棺に横臥伸展で葬るもので、墓坑の大きさで大・中・小の3型に分類される。男性の三分の一には斧鉞を、女性の三分の一には紡錘車の副葬が見られる。

そのような特徴をもつ夏家店下層文化の広がりには異論が多く、それを整理した著者は、燕山の北、遼西から内蒙古東部が中心で、燕山南・西を周辺地帯と位置づけた。また、層位関係で確認された紅山文化→小河沿文化→夏家店下層文化→夏家店上層文化という系譜の中で、炭素14年代で夏家店下層文化に紀元前2300—1600年という年代が与えられていても、文化的継続の有無に問題がある。著者は東北アジアで散発的に発見される殷周青銅器の出土状況から、夏家店下層文化と上層文化は直接連続せず、遼西から内蒙古東南部では魏営子類型、遼寧省中部から東部にかけては高台山文化が挟まると結論づけた。

「第三部 東北アジア青銅器文化の発達」は、著者が最も精力を傾けた分野であり、とくに「Ⅰ 中国東北地方の初期金属器文化の様相—考古資料、とくに青銅短剣を中心として—」の成果や提起された問題点は様々な形で引用され、時には批判されて、東北アジアだけでなく朝鮮半島や日本の青銅器研究における指針となってきた。主題となるのは、東北アジアで発見例が豊富な遼寧式銅剣である。

遼寧式銅剣の特徴は、剣身、剣柄、剣把頭を別々に作り、それを組み合わせて完全な剣の形にする点にある。そこに注目して、剣柄をⅠa～c式、Ⅱa～e式、Ⅲ式の3型式9種に、剣把頭をⅠ～Ⅳ式の4型式に、剣身を遼寧Ⅰ～Ⅳ式の4型式に細分し、各各の変遷を明らかにするとともに、各部の組み合わせによって、その変遷観を確実なものとする。その結果提示されたのが、東北地方初期金属器文化を、剣柄Ⅰ式を指標とする第一期、剣柄Ⅱ式を指標とする第二期の、2期区分である。さらに、墓葬において共伴した銅斧・銅鑿・銅鏃・銅錐・銅釣針などの生産用具、青銅製刀子・馬具・飾金具・土器・銅鏡などの生活用具にも検討を加え、とくにⅠ・Ⅱ式に細分した銅斧との共伴関係で、この2期区分の妥当性を追認する。各時期の絶対年代に関しては、第一期の烏金塘三号墓で共伴した銅戈が中原で紀元前7～6世紀のもので、伝播時間を配慮して紀元前5世紀頃、第二期を明刀銭の共伴から紀元前3世紀前後とする。

遼寧式銅剣に特徴づけられる遼寧初期金属器文化を担った民族名に関して、従来は、東胡説と古朝鮮説とがあった。上記の手続きによって導いた紀元前5～3世紀という年代と遺物組成や遺跡の分布を、史書に現れた東北アジア諸民族の動向と対比した場合、それが東胡である蓋然性が高いと著者は結論づける。また、前漢期に並行する遼寧省西岔溝遺跡の古墓群を築いた民族を烏桓（丸）とする説に対して、オルドス式剣の系譜を引く触角式銅剣に代表される西岔溝文化を匈奴系文物と著者は考える。

また、遼寧式銅剣にともなう生産用具や生活用具の変遷から、第一期初期の十二台営子墓では、狩猟・牧畜が主、農耕が従で、第一期後半には鉄製農工具が出現。これを燕の東方進出ととらえ、これを契機に定着農耕文化への移行が進む。墓葬においても、第一期の氏族共同墓地的様相から第二期の階級社会的墓地構成への変遷が認められ、遼寧の初期金属器時代が階級社会への移行期であると結論する。

第三部Ⅰの著者の論文をめぐって、その後、最も問題となったのは遼寧式銅剣の起源である。著者が展開した遼西起源説に対して、中国人研究者の間から、遼東こそが起源地であるとする見解が強く主張されたのである。「Ⅱ 遼寧省東部地域の青銅器再論」は、第二部で展開した中国との国際共同研究のもう一つの成果、すなわち中国各地の博物館等が所蔵する資料を実査・検討した結果報告を兼ねた、遼東起源説への反論である。遼寧省東部出土の青銅器を紹介し、遼東への青銅器の伝

播が殷代まで遡ることやその伝播経路を推定した後、遼東起源説の根拠となった「最古型式」が非実用的な派生型式であり、遼東起源説が成立しないことを論証する。そして、遼東における遼寧式銅剣が遼西と同じ歩調をとりながら、剣身や剣柄において異系統のものが混在し、宝器化の方向をたどることに、多様な民族で構成された遼東の様相が現れていると結論づけている。

第三部の「Ⅲ 最北の遼寧式銅剣」と「Ⅳ 赤峰市寧城小黑石溝と南山根遺跡」もまた国際共同研究を通じて実査・検討した初期金属器文化の遺物の紹介と、それが提起する問題点の指摘である。Ⅲにおいては、内蒙古最北部の呼倫貝爾（ホロンバイル）で発見された遼寧式銅剣が遼西型、黒龍江省双城市発見の遼寧式銅剣が遼東型である事実から、青銅器伝播の道に思いを馳せている。また、Ⅳにおいては、西周後期様式の青銅容器を共伴した小黑石溝1985年石槨墓や南山根101号石槨墓などの「大墓」が、各墓地で隔絶した存在となっており、威信財としての中原製青銅器を副葬したものであると主張する。しかし、一般墓とは隔絶した規模・構造の墓が、大量の副葬品をもつ「大墓」という存在形態は、中原でも春秋時代になって初めて出現するもので、小黑石溝1985年石槨墓や南山根101号石槨墓は、ともに副葬青銅器が示す西周後期よりも下降する春秋時代の「大墓」であると推測する。そして、文献史料にみる中原諸国と北方民族との抗争や交渉に着目して、その被葬者が「狄」と深い関係にあったと結論した。この結論は、共伴する中原製青銅器を根拠に、遼寧式銅剣の初現を西周期まで遡らせる第三部Ⅰ以降に提起された批判への反論でもある。

「第四部中国北方民族文化研究」においては、3世紀に至るまでの東北アジアを対象とした論考を集める。「Ⅰ 山西省太原西郊王門溝出土の卵形三足甕」は、岡山大学が保管する和島誠一収集の灰陶卵形三足甕の類例を集成し、それが山西省太原盆地を中心に、南は山西省南部、東は河北省西北部、北と西は内蒙古・陝西省の長城地帯に分布する龍山文化後期から二里頭文化期を特徴づける遺物であること、形態的に見て内蒙古大口遺跡出土例も龍山文化後期に位置づけることができ、河北省三関遺跡出土例（夏代後半）には、内蒙古の卵形三足甕の影響が見て取れる事実などを指摘し、山西省太原盆地（晋中）からの一元的な波及を解く説を批判する。

「Ⅱ 内蒙古オルドス地方の匈奴墓」は、1970年代に明らかになった蒙古高原における確実な匈奴墓の分析である。従来、匈奴墓として著名なノイン・ウラは外モンゴルに位置し、1930年代、蒙古高原に古代遊牧民の遺跡を求めた水野清一・江上波夫による『内蒙古・長城地帯』は、基礎資料となる綏遠青銅器の研究にとどまっていた。著者は、1960～70年代に調査された内蒙古自治区における9遺跡17基の匈奴墓を対象とし、なかでも最も詳しく調査・報告された桃紅巴拉一・二号墓を中心に匈奴墓の特色を浮き彫りにする。

すなわち、これらは長方形堅穴土坑墓で、棺槨の存在は不明であるが、埋葬途上で犠牲獣を捧げるのが特徴的である。副葬品でも、鳥頭角式短剣・鶴嘴などの青銅武器、棒状厚手の刀子・無文短冊形の銅斧などの生活用具の型式が、東西約400km、南北約200kmの間で共通する。その間の交流が密接だったのである。それらの副葬青銅器の形態は、第三部で明らかにした遼寧省西部から内蒙古東南部における遼寧式銅剣や銅斧・刀子と対蹠的な特質を持ち、遼寧式銅剣に代表される初期金属器文化の荷担者を東胡とする著者の見解を裏づける。また、桃紅巴拉墓出土例によって鳥形鉸具と環状金具が匈奴の帯留金具であることが明確となり、従来、動物意匠の帯鉤と誤解されてきた「師比」の正体が判明し、中原の帯鉤が匈奴の影響ではなく、中原独自に発達したものと考えられる。著者は対象とした匈奴墓を第一期（戦国前・中期頃）、第二期（戦国中期）、第三期（戦国後期から前漢）に分類し、第一・二期には顕著な中原文物はなく、第三期の車馬具や鉄器、多数の金銀製品が、単于のもとに結集した匈奴が、中原に強い圧迫を加えた事実を反映していると見る。

「Ⅲ 烏桓と鮮卑」は、3世紀を中心とした遺跡・遺物の分析を通じて、匈奴の移動によって空白となった蒙古草原に、東胡の後裔を称する烏桓と鮮卑が進出し支配するに至った経過を、文献史料も駆使しつつ描き出す。すなわち、西は内蒙古ホリಂಗール県・ウランチャップ盟から、東は遼西に至る地域の遺跡を取り上げる。そして、東部鮮卑の慕容部の遺跡と考えられる遼寧省の房身村墓群や保安寺墓群、西部鮮卑の拓跋部の遺跡と考えられる内蒙古の盛楽城を中心とした遺跡から、3世紀の蒙古草原が鮮卑族の支配下にあり、中原の諸王朝は武力討伐よりも、内蒙古の小壩灘遺跡出土の西晋王が假授した金銀印が示すような懐柔策を採ることが多かったと見る。

「Ⅳ 内蒙古“岱海”地域の考古学的研究」は、1995—97年に行った内蒙古文物研究所との国際共同研究成果の概要である。正式の報告ではないが、著者が切り開いた新しい中国考古学の研究方式から、次の新たな研究の地平が広がることを示して、

今後の研究につないでいる。

論文審査の結果の要旨

『東北アジア民族文化研究』は、著者が長年たずさわってきた中国考古学研究のなかから、新石器時代・青銅器時代（初期金属器時代）から紀元後3世紀に至るまでの、遼寧省西部（遼西）から内蒙古自治区東南部（内蒙古東南）を中心とする東北アジア地域を扱った論考を編集したものである。東北アジア地域は中原からは常に辺境視されてきたが、一方的に中原文化を受け容れていたわけではなく、新石器時代の初めから、独自の文化を生成し発展させてきた。著者が最も精力を傾けて研究した遼寧式銅剣が、朝鮮半島を経て、日本の弥生時代の青銅剣の源流となったように、東北アジア地域の文化は東西、そして南の中原地域に対しても、ある程度の影響を与えてきた。すなわち、極東地域の文化発信基地としての役割を果たしてきたのである。本論文は、そのような東北アジア文化の独自性、および継続性を叙述することを目的に執筆・編集されている。

本論文の一つの特色は、1990年にはじまる文部省科学研究費補助金の国際学術共同研究の成果をふんだんに盛り込んでいることである。東北アジア、すなわちかつてその一部が「満州」と呼ばれた地域は、日本帝国主義の大陸侵略の拠点となり、そこでの考古学的調査は多くの新知見をもたらした一方で、「軍に守られた発掘」として指弾されることが多い。戦後日本における中国考古学は、中国社会科学院をはじめとする各地の研究機関が実施した発掘調査成果を、わずかな報告を通じて蓄積し、終戦前の成果にそれを重ね合わせて検討を加える時代が長く続いた。日中国交正常化の後も、考古学の敷居は高く、留学生の交換などは早くから実施されても、遺物の実見・実査すらままならず、遺跡の調査などは夢の彼方であった。しかし、地道な学術交流が少しずつ信頼関係を生み、その一つの到達点がこうした国際共同研究という研究方式なのである。

しかし、著者の中国考古学は、日中国交正常化以前から積み上げたものである。本書の核となる第三部「Ⅰ 中国東北方の初期金属器文化の様相—考古資料、とくに青銅短剣を中心として—」は、まさに終戦前の蓄積に、乏しい新中国からの情報を重ね合わせて書き上げられた。東北アジアの青銅器時代を特徴づける遼寧式銅剣を主題としたこの論文は、考古学の最もオーソドックスな方法を駆使して展開する。すなわち、遼寧式銅剣を構成する各要素（剣身、剣柄、剣把頭）を細分して変遷を明らかにし、共伴遺物からその変遷観を確認するとともに実年代を確定する。さらに、分布、盛行年代、そして遺物組成から推定できる生活様式を配慮して、史書の中から、遼寧式銅剣に代表される東北アジア青銅器時代を担った民族として東胡を特定し、共伴遺物や墓葬の変遷から、彼らの生業の変化や社会変化を描き出す。

このようなオーソドックスな方法で展開された論考は、公表後30年を経た現在でもまったく色あせていない。もちろん、その間の発掘調査は多くの新資料をもたらし、新たな研究成果を生み出した。しかし、そうした中で、第三部Ⅰの論文の成果や、そこで提起された問題点は様々な形で引用され、時には批判されて、東北アジアだけでなく朝鮮半島や日本の青銅器研究における指針となってきたのである。

著者の第三部Ⅰの論文をめぐる、その後、最も問題となったのは遼寧式銅剣の起源地である。著者が展開した遼西起源説に対して、中国人研究者の間から、遼東こそが起源地であるとする見解が強く主張されたのである。第三部の「Ⅱ 遼寧省東部地域の青銅器再論」は、中国との共同研究の成果報告を兼ねた遼東起源説への反論である。遼寧省東部出土の青銅器を紹介し、遼東への青銅器の伝播が殷代までさかのぼることやその伝播経路を推定した後、遼東起源説の根拠となった「最古型式」が非実用的な派生型式であり、遼東起源説が成立しないことを論証する。そして、遼東における遼寧式銅剣が遼西と同じ歩調をとりながら、剣身や剣柄において異系統のものが混在し、宝器化の方向をたどることに、多様な民族で構成された遼東の様相が現れていると結論づける。本論の背景には、遼東地域の遺跡・遺物調査だけではなく、朝鮮半島の遼寧式銅剣をも見すえた著者の広い知見が存在し、その発言は重い。

第三部の「Ⅳ 赤峰市寧城小黑石溝と南山根遺跡」も国際共同研究の成果報告であると同時に、西周後期様式の青銅容器との共伴を根拠に、遼寧式銅剣の初現が遼東とする批判に対する反論が展開されている。すなわち、これらは威信財として中原製青銅器を副葬したもので、大量の副葬品や規模・構造において一般墓と隔絶した「大墓」は、中原においても春秋時代になって初めて出現する。したがって、小黑石溝1985年石槨墓や南山根101号石槨墓は、ともに副葬青銅器が示す西周後期よりも下降する春秋時代の「大墓」であると著者は主張する。そして、文献史料にみる中原諸国と北方民族との抗争や交

涉に着目して、その被葬者が「狄」と深い関係にあったと結論するのである。

著者の長年の懸案となっていた東北アジア青銅器文化の解明という研究課題を解決したのが第三部であるならば、新たな研究成果を踏まえて、対象とする時代枠を遡らせたのが第一部、第二部であり、紀元後3世紀に至るまでの東北アジア諸民族の動向を、文献史料なども駆使して論じたのが第四部である。

「第一部 赤峰紅山考古研究」は、先紅山文化（興隆窪文化と趙宝溝・小山文化）、紅山文化、後紅山文化と発展した東北アジアの新石器文化に関する論考で、「第二部 東北アジア文明の源流」は、東北アジアにおける青銅器時代の開始を示す夏家店下層文化に関する論考である。これらは、濱田耕作・水野清一共著の『赤峰紅山後—熱河省赤峰紅山後先史遺蹟—』（東方考古学叢刊甲種第6冊、東亜考古学会、1938年刊）が提起した赤峰第一次文化・第二次文化の時期区分を、その後の研究で再検討し再構成した成果であり、新石器時代から初期青銅器時代に関する東北アジア考古学における現在の到達点を示している。とくに近年発見された牛河梁遺跡の積石遺構や女神廟など紅山文化期の墓地・祭祀遺構、800基以上におよぶ夏家店下層期の墓が発掘された大甸子墓地など、近年の内蒙古自治区における発掘成果の紹介は圧巻である。また、第二部の「Ⅱ 遼寧凌源城子山城塞遺跡調査と研究」は、国際共同研究の成果の一つでもある。

このように本論文は、東北アジア考古学研究の現在の到達点を示す。とくに、遼寧式銅剣を中心とした著者の東北アジア青銅器文化の研究は、今後なお青銅器研究の指針として参照し続けられるであろう。また、第一部から第四部に至る論文の構成によって、東北アジア古代文化の独自性を描くという著者の意図は十分に達成されている。しかし、不十分な点、不満な点も残されている。とくに、著者が意図した東北アジア古代文化の継続性を明らかにするという点に関しては、旧石器文化から新石器文化への展開が可能か否かの検討が不十分の感は否めない。また、『赤峰紅山後』のなかで提起された細石器文化についての論述も乏しい。さらには、夏家店下層文化の由来も曖昧なままである。しかし、考古学は発掘調査成果があって、初めて論が展開できる。今後の調査に待つ点が多い東北アジア考古学において、文化の「継続性」を示すには、時期尚早といわねばなるまい。その意味で、国際共同研究という新たな研究方式の今後の展開に期待する点は大きい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年9月26日、調査委員3名が、学識確認のための試験および論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。